

年間テーマ：神とともに歩む教会～ともにささげるミサ

第2回 開祭

「一つになろう、キリストのうちに皆、一つになろう」（『典礼聖歌』405）。皆さんもよくご存じのこの聖歌は、キリストのからだに結ばれた人々の一致を歌う、ミサにふさわしい聖歌です。今回のセミナーで取り上げるミサの「開祭」は、わたしたちがキリストのうちに一つになるために心を整えることを目指しています。

さまざまな思いを抱えてミサに集まる一人ひとりが、開祭に含まれる入祭、あいさつ、回心の祈り、いつくしみの賛歌、栄光の賛歌、集会祈願を通してどのようにミサに導かれていくのか、と一緒に考える機会といたしましょう。

1. ミサはいつから始まるのか？

エマオへ向かう弟子と復活したイエスとの出会いを参考に（ルカ 24・14-15）

ミサは家庭から始まっている

ミサは「非日常」のひとつときか？

（M. Benini, *Were Not Our Hearts Burning? Understanding the Mass – Living the Eucharist*, Paulist Press, 2026 参照）

2. 開祭の要素と目的

ことばの典礼の前に行われる式、すなわち、入祭、あいさつ、回心の祈り、いつくしみの賛歌（キリエ）、栄光の賛歌（グロリア）、集会祈願は、開始、導入、準備の性格をもっている。

これらの目的は、一つに集まった信者が一致することと、神のことばを正しく聴き、感謝の祭儀をふさわしく行うよう自らを整えることにある。

典礼書の規定に従ってミサと結びつけられているいくつかの祭儀では、開祭は省かれるか、特別の方法で行われる。（「ローマ・ミサ典礼書の総則」46、以下「総則」と表記）

会衆の一致、神のことばを聴く準備、エウカリスティアへの準備

3. 入祭の歌、行列、祭壇の表敬、あいさつ

会衆が集まった後、司祭が助祭と奉仕者とともに入堂するとき、入祭の歌が始められる。この歌の目的は、祭儀を開始すること、会衆の一致を促すこと、会衆の思いを典礼季節や祝祭の神秘に導くこと、そして司祭と奉仕者の行列を支えることにある。（「総則」47）

日本では、内陣に着くと、司祭と助祭と奉仕者は手を合わせて深く礼をして祭壇に表敬する。

それから、表敬のしるしとして、司祭と助祭は祭壇に近づき、両手で祭壇に触れ、深く礼をする。司祭は、適当であれば十字架と祭壇に献香する。（「総則」49）

入祭の歌が終わると、司祭は自席で立ち、会衆全体とともに十字架のしるしをする。それから司祭はあいさつをして、集まった共同体に主の現存を表す。このあいさつと会衆の応答によって、ともに集まった教会の神秘が表される。

会衆へのあいさつが終わると、司祭あるいは助祭、あるいは信徒の奉仕者は、非常に短いことばで、信者をその日のミサに導入することができる。（「総則」50）

入祭の歌：ミサの開始、会衆の一致、典礼季節や祝祭の神秘への導入、行列の支え

十字架のしるし：三位一体の神との交わり・父と子と聖霊のみ名によって洗礼を受けたことを意識し

て、ゆっくりと、丁寧に ⇒ 「アーメン」

あいさつ：神とキリストがともにおられることの確認・宣言＝集まった教会の神秘の表現

4. 回心の祈り

その後、司祭は回心の祈りに招く。これは、短い沈黙のひとつきの後、共同体全体が一般告白の形式をもって行い、司祭のゆるしのことばによって結ばれる。しかし、このことばは、ゆるしの秘跡の効果をもつものではない。

主日、とくに復活節の主日には、いつも行っている回心の祈りの代わりに、洗礼を思い起こすために水の祝福と灌水を行うこともできる。（「総則」51）

「わたし」が主語になる数少ない式文

自らの「思い、ことば、行い、おこたり」を想起 → 神と共同体に心を開く → 互いに回心を祈り合う

5. いつくしみの賛歌（キリエ）

回心の祈りには、つねにいつくしみの賛歌（キリエ）が続く。すでに回心の祈りの一部となっていた場合はこの限りではない。この歌は、信者が主に呼びかけてそのあわれみを願う歌であるから、通常、一同によって、すなわちこの役割をもっている聖歌隊または先唱者と会衆とによって歌われる。

応唱は通常、二回繰り返される。ただし、種々の言語や音楽の性格、あるいはその他の事情から、三回以上繰り返すことができる。いつくしみの賛歌（キリエ）が回心の祈りの一部として歌われる場合、個々の応唱の前に「トロープス（短い詩句）」を入れる。（「総則」52）

「わたしたちは、神に、わたしたちの主を目を注ぎ、憐れみを待ちます。」（詩編 123・2）

悔い改め（放蕩息子、ザアカイ、サマリアの女など）、神のいつくしみを願う（詩編 51・3）

「主よ、あわれんでください！」という叫び（マタイ 15・22、20・30、ルカ 17・13）

⇒ いつくしみ深い主をたたえる心で

6. 栄光の賛歌（グロリア）

栄光の賛歌（グロリア）は、きわめて古い尊ぶべき賛歌であって、聖霊のうちに集う教会は、この歌をもって父である神と小羊に賛美をささげ、祈る。この賛歌のことばは他のことばに置き換えることができない。司祭、あるいは適当であれば先唱者が聖歌隊が歌い始めるが、全員と一緒に、あるいは会衆と聖歌隊とが交互に、あるいは聖歌隊のみが歌う。歌わない場合には、一同と一緒に、もしくは二手に分かれて互いに応唱して唱えるべきである。

この賛歌を歌うか、または唱えるのは、待降節と四旬節以外の主日、および祭日と祝日、さらにとくに盛大な祭儀のときである。（「総則」53）

父である神（「神なる主、天の王、全能の父なる神よ」と小羊キリスト（「主なる御ひとり子イエス・キリストよ。神なる主、神の小羊、父のみ子よ」）への賛美の歌

いつくしみ賛歌の要素も（「いつくしみをわたしたちに」）

「イエス・キリストよ」での頭を下げる一礼（「総則」275）

7. 集会祈願

次に司祭は、会衆を祈りに招く。そして、一同は司祭とともにしばらく沈黙する。それは、自分が神のみ前にいることを意識し、心の中で自分の願いを呼び起こすようにするためである。それから司祭は、「集会祈願」と呼ばれる祈願を唱える。この祈願によって、祭儀の性格が表現される。教会の古くからの伝統に従い、集会

祈願は通常、聖霊において、キリストを通して、父である神に向けられ、以下のような方法で三位に言及する結び、すなわち長いほうの結びのことばによって結ばれる。

- ・祈願が御父に向かう場合―「聖霊による一致のうちに、あなたとともに神であり、世々としえに生き、治められる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。」
- ・祈願が御父に向かうが、その結びが御子に言及している場合―「主キリストは、聖霊による一致のうちに、あなたとともに神であり、生きて、治めておられます、世々としえに。」
- ・祈願が御子に向かう場合―「あなたは、聖霊による一致のうちに、御父とともに神であり、生きて、治めておられます、世々としえに。」

会衆は嘆願に心を合わせ、応唱「アーメン」によって、この祈願を自分のものとする。

ミサでは、集会祈願がつねに一つだけ唱えられる。（「総則」54）

「集会」祈願＝コレクタ（collecta、集祷文）＝個々人の祈りを一つに集めて教会（集会）の祈りとする

構造：神への呼びかけ → 神のわざを思い起こす → 嘆願 → 結び

「祈りましょう」－沈黙－司祭は手を広げて「全能の神よ…」

－「聖霊による一致のうちに…」－「アーメン」

〈本日（年間第 14 主日）のミサの集会祈願〉

聖なる父よ、

あなたは、倒れていた世界を、

キリストの死によって新しいのちに立ち直らせてくださいました。

信じる者を罪の束縛から解放し、

終わりのない喜びに預らせてください。

聖霊による一致のうちに、あなたとともに神であり、

世々としえに生き、治められる御子、

わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

8. 開祭に見られるシンボル（しるし）

- ・集まる：教会のしるし、「会衆が集まると…」
- ・立つ：主の復活を喜び祝うしるし
- ・アルバ：奉仕者のしるし
- ・典礼色：祝われる神秘の特徴、典礼暦年の流れのしるし
- ・行列：会衆をその日のミサに導くため
- ・行列用の十字架：キリスト者の歩みを導く主の勝利のしるし
- ・香：崇敬、祝福、祈りのしるし
- ・祭壇：生きた石（一ペトロ 2・4、エフェソ 2・20 参照）であるキリストのしるし
- ・祭壇への表敬：手を合わせる＋礼、敬意と栄誉のしるし
- ・ろうそく：崇敬と祭儀の喜びのしるし
- ・祭壇の十字架：主の受難を思い起こすしるし
- ・十字架のしるし：主の過越にあずかる者のしるし
- ・オランズ：すべての人のために祈る教会のしるし
- ・司祭と奉仕者：キリストの現存のしるし（『典礼憲章』7）